

— 万葉集語法ノ —

一般に過去の助動詞といわれる「き」及び「けり」は、万葉集に「き」が六二四例、「けり」が三七一例ある。（「万葉集総索引」に拠る。但し「き」の未然形といわれる「せ」及び「総索引」の誤りとわかる用例を除いた。）右の用例について、それぞれの用法を考察してみると、「き」と「けり」とにはやはり異なった用法のあることが知られる。

一、終止形「き」  
二三例

- (1) 動詞十き。……………九  
(2) 助動詞十き。……………五 (ずき。……三ぎりき。……二)  
(3) き十助詞……………八 (きや。……五きと……二きとち……一)  
右の中「ずき」の例は

○從情毛吾者不念寸山河毛隔莫國如是戀常羽（卷四、六〇一）

○從情毛我者不念寸又更吾故鄉余將還來者（卷四、六〇九）

○現毛夢毛吾者不思寸振有公余此間將會十羽（卷十一、二六二）

この「不寸」に関しては、山田博士は「奈良朝文法史」で、「ずけ」ば「ずけり」「ずけむ」の用例のあることからして、「ズキ」と

訓むべきであるとしている。(同書三四〇頁) 沢瀉博士の「万葉集注釈」でも山田博士と同じ見解で、「ザリキ」と訓む場合は、「不相<sup>フコウ</sup>有<sup>アリ</sup>」(巻四、五三八)と表記する例と対照してやはり「ズキ」であるとしている。(巻四二九九頁) また「古典文学大系」本では、山田博士と同意見であるが、(巻三、二〇七頁注) 訓みは「ザリキ」となっている。一方武田博士の「万葉集全註釈」(巻四、二〇六頁)を始め多くの注釈書はすべて「ザリキ」と訓んでいる。要するにこれには仮名表記の用例がないのでいずれか判定しかねるのであるが、これについてはここで詳記することを略する。

- (1) 過去における動作、存在を表わすもの……………一六
  - (2) 過去における動作の継続を表わすもの……………一
  - (3) いわゆる完了と同じ意を表わすもの……………五
- 三種に分類される。完了の意に解せられるものは、

○…嘆乍 吾泣涙有間山雲居輕引雨余零寸八（卷三、四六〇）

ヨルヒルトイワキシラズワガコフルココロハケダシイメニモエキヤ、  
○夜晝云別不知吾戀情蓋夢所見寸八（卷四、七一六）

○古郷の奈良思乃岳能霍公鳥言告遺之何如告寸八（卷八、五〇）

○天漢水左閉而照舟競舟人妹等所見寸哉（卷十、一九九六）

○雨霧相風左倍吹奴大口乃眞神之原從思管還余之人家余到伎也（卷十三、三二六八）

の五例であるが、右の「……きや」の意味は、

○聞津哉登妹之間勢流雁鳴者眞毛遠雲隱奈利（卷八、一五六三）

○夜夫奈美能佐乃余夜度可里波流佐米余許母理都追半等伊母余都宜都夜（卷十八、四一三八）

その他一九七六・一九七七等に見られる「……つや」と意味において特に区別はないと思われる。だとするとこの場合の「き」は過去における動作を表わすものではなく、単にある動作が行なわれたかどうかを表わすもの、いわゆる完了の意と解し得るのである。もっとも「雨に降る」「夢に見る」等の動作が過去において行なわれたかどうかという意を表わしたものと解すれば、過去の意とも考えられるが、筆者は完了の意と考える。なお「き」の表記がなくて「キヤ」と訓まれている例がある。それは、

○慥使乎無跡情乎曾使余遣之夢所見哉（卷十二、二八七四）

○爲便毛無片戀乎爲登比日余吾可死者夢所見哉（卷十二、三二二）

○吾妹兒余戀而爲便無三白細布之袖反之者夢所見哉（卷十一、二八一）

であるが、これらも「ツヤ」と完了の意に訓んでも差支えない。いやむしろの方がよいのではなからうか。要するに上記76の訓

みに倣ったものと思われる。

次にまた、「き」の表わす動作、存在等の主体となるものを考察すると、次の如く分類される。

(1) 自己の動作、存在等を表わすもの（以下単に「自己」と記す）

……一四

(2) 相手の動作、存在等を表わすもの（以下単に「相手」と記す）

……一〇

(3) 第三者の動作、存在等を表わすもの（以下単に「三者」と記す）

……八

元来「き」は過去における自己の直接経験を叙述する助動詞であるとして一般に説かれている。しかるに第三者の動作を表わすのに用いられているのはなぜか。殊に伝説を叙する場合は同じ過去の助動詞でも、過去の事実を伝承的に述べるといわれる「けり」を用いるのが本筋であると思われるのに、ここに「き」を用いた例が二つあるのはなぜか。一つは例の中大兄皇子の「三山の歌」（13）であり、他の一つは、

○於登余吉岐目余波伊麻太見受佐容比實我必禮布理伎等數吉民萬通良楊滿（卷五、八八三）

である。思うに三山の歌は、作者中大兄皇子が、三山の妻争いの伝説に強い感慨を催し、あたかも現実自己が直接見聞した如き気持ちになって歌われたものであろう。また佐用姫の歌は、「領巾振りきとふ」と、「き」の下に伝承の意の助詞「とふ」があるのでその矛盾がなくなったのであろう。また第三者の六例中三例は上記の「きや」の歌（1506・1996・3268）であり、他は

○多良志比賣可美能美許等能奈都良須等美多々志世利斯伊志遠  
多禮美吉(卷五、八六九)

○二上山登妣古要氏久母我久理可氣理伊余伎等之波夫禮都具  
禮……(卷十七、四〇一一)

○於之巨流難波乃久余々阿米能之多之良志實之伎等伊麻能乎  
余多要受伊比都々……(卷二十、四三六〇)

の三例である。869の「誰見き」は「誰が見たのか、自分は、まだか  
つて見なかった」の意で、自己の経験がむしろ気持として中心と  
なっているであろう。4011・4360の歌は、「かけり去にき」「知らし  
めしき」の下にそれぞれ「と告ぐれ」「と言ひつつ」とあるか  
ら、上記883の場合と同様に解し得る。なお前記「きや」の460・716  
の歌も「吾が泣く涙」「吾が恋ふる情」がそれぞれ主体であるので  
一応自己の中に分類したのであるが、実際は「涙」「情」が主語で  
あるから、客観的な事象と見るべきであろう。すると、「きや」の  
主体はすべて第三者ということになり、この「き」が過去ではな  
くて、完了の意に用いられたことの一つの裏付けを示しているの  
ではなからうか。

次に完了の助動詞と接続したものとして、「てき」……四例、  
「にき」……六例、「りき」……一例が見られる。

「てき」はすべて過去の意を表わし、その主体は自己である。  
この場合の「て」は完了の意を表わすというより、むしろ自己の  
意志的動作を強調する意味で、いわゆる強意と見るべきであら  
う。これに反して「にき」はすべて完了の意に用いられ、過去の  
意に解すべきものはない。そしてその主体は、第三者が一例で、

他は皆自然の現象である。なお「りき」は過去の意を表わし、そ  
の主体は自己である。

以上を総合すると、「き」は、自己の動作存在を直叙する場合  
は過去の意で、第三者及び自然現象を直叙する場合は完了と同じ  
意を表わすと見られる。

二、連体形「し」四一五例

- (1) 動詞＋し＋体言……三二三、(2) 動詞＋し。(係助詞を受  
けないで終止する形)……四、(3) 動詞＋し(中止する形)……  
……六、(4) 形容詞＋し(形容詞に接続するもの)……四、  
(5) 助動詞＋し(し(尊敬)、え(受身)、なり、ざり、しめ、ひ(難  
続))……一四、(6) ぞ……し。(係助詞を受けて終止する  
形)……二五、(7) や・か……し。(同右)……四、(8)  
し＋接続助詞(も、からに、に、を、ものを)……二〇、  
(9) し＋格助詞(と、を、より)……八、(10) し＋副助詞(は、  
も、だに、なへに)……八、(11) し＋終助詞(かも・ものか  
も、がに)……三、(12) し＋ぞ(係助詞)……一、(13) そ  
の他、ごとく、もころ、まにまに、すなわち等の語を下に伴う  
もの……五、

右の中、係助詞なしで終止する形のは、

- 大船之津守之占余將告登波益爲余知而我二人宿之(卷三二〇)  
○山河余笠平伏而不肯盛年之八歳乎吾竊舞之(卷十一、二二三)  
○靈合者相宿物乎小山田之鹿猪田禁如母之守爲裳(卷三二〇〇〇)

一云、母之守之師

○吾勢祐乎倭邊遣登夜深而鷄鳴露余吾立所霑之(卷二、一五)

であるが、これは山田博士の説(奈良朝文法史三〇一頁)の通り余情終止と見るべきで、右の300の「母が守らすも」を「母が守らし」といひ換え得ることも知られる。この用法は他の動詞・助動詞にも多く見られる形である。なおこの場合「一が……し」の形をとることに注意すべきである。従つて山田博士が余情終止の例として「奈良朝文法史」に挙げられた、(三〇一頁)

○幾許思異目鴨敷細之枕片去夢所見來之(卷四・六三三)

○大船余眞梶繁貫水乎出去之與將深潮者干去友(卷七、二三六)は、武田博士の説(「全註釈」卷四、二四九頁及び卷六、三〇〇頁)

の如く前者の「所見來之」は「所見來」、後者の「水乎出去之」は終止ではなくて普通の連体形と見るべきであらう。

次に中止する形のものは、

○吾岡之於可美余言而令落雪之摧之彼所余塵家武(卷二、一四〇)

○大島乃羽貝乃山余吾戀流妹者伊座等人云者石根左久見手名積來之吉雲曾無寸……(卷二、二一〇)

○春霞春日里之殖子水葱苗有跡云師柄者指余家牟(卷三、四七)

○波流楊那宜可豆良余乎利志鳥梅能波奈多禮可有可倍志佐加豆岐能倍余(卷五、八四〇)

○古郷之奈良思乃岳能霍公鳥言告遣之何如告す八(卷八、五〇〇)

○立而居而待登待可彌伊泥氏來之君余於是相挿頭都流波疑(卷

## 十九、四二五三)

である。これらは武田博士の「全註釈」の説に従つて中止法とみる。いわゆる連体形中止の場合は、「何々したが、」と一旦中止して、再び上の意を受けて、「それは……」「それが……」「……それを」または「そして……」「しかるに……」のように下に続けるもので、一種の余情的中止と見られる表現である。これは他の動詞・助動詞にも見られる用法である。但し104の「雪之摧之」の「摧」は、「全註釈」「古典大系」等殆んどの注釈書は名詞に解している。しかし沢瀉博士は「注釈(卷二・六五頁)」で動詞と見て、従つて「之」を過去の助動詞の連体形の中止法と解している。筆者は沢瀉博士の説に従つた。一方840の「可豆良余乎利志」の「志」は、沢瀉博士は、中止法ではなく、下の「鳥梅能波奈」に直接続く普通の連体形であるとされており、「古典大系」や鴻巣盛広氏の「万葉集全釈」(第二冊六一頁)等も同様に解している。また土屋文明氏の「万葉集私注」(卷五、一〇〇頁)や窪田空穂氏の「万葉集評釈」(卷五、九九頁)では、この「志」を終止法の意に解している。また窪田氏は40の「苗有跡不師」の「師」も同様に連体形終止と解している。筆者は武田博士の「全註釈」(卷五、一一四頁)の説に従つてやはり中止法と見たのである。これについての詳しい論証ここでは省略する。

次に連体形「し」の用法を、終止形「き」の場合と同じ方法で分類すると、

- |                 |                |
|-----------------|----------------|
| (1) 過去……………三五七  | (1) 自己……………二二三 |
| (2) 過去継続……………二六 | (2) 相手……………七九  |

(3)完了……………三二 (3)三者……………六九

(4)自然の事象……………三五

となる。過去及び過去継続の意を表わす「し」の三八三例は、「き」に準じて考えると、自己の動作、存在を表わすものでなければならぬのに、自己以外のものが主体となる例が、約半数近くの二七三例ある。その中、浦島とか竹取翁とかいう伝説上の人物の動作を述べるものが一七例もある。この場合「けり」を用いなかったのは、その人物を単に伝説として客観的に述べるのではなく、むしろ伝説の中に自己を没入させ、自己の直接の見聞（経験）として述べる意識が強く働いているものと考えられる。また自然の事象に用いられたものが二九例あり、終止形「き」には見られなかったものである。しかしこの場合も多くは自己の直接の経験内容によるものであり、さもなくば直接の経験として直叙する表現である。第三者の場合も同様に解釈される。

完了の意を表わす「し」三二例の中、自己の動作を表わすものが三二例の多数に上る。これも前記「き」の用法と対照すると矛盾を感じるのであるが、その用例を検討すると、前掲105の歌の「吾立所露之」と、

○大船之念憑師君之去者吾者將戀名直相左右二（卷四、五五〇）の「思ひたのみし」以外はすべて、

○泊瀬川白木綿花余墮多藝部瀬清跡見余來之吾乎（卷七、二七〇）  
○落雪乎腰余奈都美豆參來之印毛有香年之初余（卷十九、四三〇）  
の如く「来し」の例である。これらは普通に解釈すれば、単に過

去における自己の動作を述べたのではなく、自己の動作あるいは状態の現在における存続を表わすものである。したがって完了の助動詞「つる」に置き換え得るものと考えられる。しかし「来る」という動作を現在の自己と一応切り離して、単に過去における行動として述べたものと考ええるならば、これらの「し」もまた過去の意を表わしたものと解釈できるわけである。要するに客観的な自然現象などの叙述と異なって、自己の動作・存在を述べる場合は、それが過去の動作としての叙述か、または現在の自己に關しての存続的動作としての叙述かを讀みとらねばならない。したがってそれが過去か完了かを決定することはきわめて微妙かつ困難のように思われる。しかし「し」が過去の助動詞であるからといって、すべて無条件に過去の動作を表わすと速断するのは危険である。

次に完了の助動詞と接続したもので、

「てし」……四二例、「にし」……八〇例、「りし」……二三例「た

りし」……二例ある。  
「てし」四二例中、完了の意に解し得るものが九例ある。その中「…伊波紀欲利奈利提志比等迦…」（卷五、八〇〇）「吾妹兄之結手師紐乎將解八方…」（卷九、一七八九）の二例以外はすべて自己の動作を表わすものである。

○大海之底乎深目而結義之妹心者疑毛無（卷十二、三〇二八）  
○於保夫福乎倍由毛登母由毛可多米提之許曾能左刀妣等阿良波左米可母（卷十四、三五五九）

の外に、397・387・3948の歌の例である。これらの「成りてし」結ひてし「固めてし」等は、その動作の現在における存続を意味するのでいわゆる完了の意と考えるのであるが、やはり過去における動作という意識が作者に強く働いているのであらう。なお3559の「可多米提之」は前掲の104・210等の「し」と同様に中止法の用法である。

「にし」七九例中、完了の用例五六、過去の用例二三である。完了の場合には、「にき」で考察した通り特に問題はないので、過去の意を表わすと思われる二三例を考察すると、

自己……一一例、三者……六例、自然現象……六例

「にし」は「にき」と同様に自然現象を表わす場合は完了の意を表わすのが普通であるが、

○春霞立余之日從至今日吾戀不止本之繁家波(卷十、一九一〇)

○雁鳴之喧之從春日有三笠山者色付丹家里(卷十、二二二二)

この他「秋風の吹きにし日より」(2083)「物思に割けにし胸は」(2818)

「過ぎにし恋い」(2927)「うぐひすはしば鳴きにしを」(4286)等は、前後の關係から考へて、過去における事象を述べたものと解される。しかし「し」を用いないで「にし」を用いたのは音数(音調)の關係によるものか、あるいは、強めて確定的に表現したものであるらうか。

また自己の動作を表わすものとしては、

○浦觸而可例西袖叫又卷者過西戀以亂今可聞(卷十二、二五七)

○吾齒之衰去者白細布之袖乃狎余思君乎母准其思(卷十三、二五三)

の外に「思ひ絶えわびにしものを」(750)「馴著きにし奈良の都の……」(1048)「買ひにし絹の」(1264)「言はれにしわが身」(3300)「別れにしより」(4220)など一一例あるが「離れし」「馴れし」といってもよい場合のように思われる。それを「にし」と表現したのは、その動作に確定的な意を持たせるためであらうか。要するにこの場合の助動詞「に」は完了の意味はなく、単なる強勢の意と考えられる。

三、已然形「しか」二四例

(1)しかば……………一三

(2)こそ……しか……………七

(3)しかど……………四

(3)事象……………三

右の中、「こそ……しか」は一般に「こそ」を受けて「しか」で終止する(係り結びの法則)ものとされているが、實際は次の例でもわかるように、意味の上では「何々した、が……」のように下句に続くと解すべきである。(沢瀉博士「注釈」卷一、二三頁)武田博士は、「シ」を原形とし、それに助詞「カ」が接続して成立したものであらうと見て、「シカ」の形で前提文となるものであると説かれている。(全注釈総説「四四九頁」)このような「コン……已然形」の機能については、大野晋氏が「解釈と鑑賞」(昭和三十一年十一月・十二月号)で詳細に述べられている。(1)

○昨日社公者在然不思余濱松之於雲棚引(卷三、四四四)

○昔許曾外余毛見之加吾妹子之奥柳常念者波之吉佐寶山(卷三、四七四)

○昨日許曾敷奈侶婆勢之可伊佐魚取比治奇乃奈太平今日見都流  
香母（卷十七、三八九三）

この外、1751・1843・3522・3531等がその例であるが、すべて「……た、  
がしかるに……」の如く逆接の意を表わしている。

次に「しか」の用法を検討すると、すべて過去の意を表わして  
いる。またその主体は上記の通りであるが、第三者及び事象（自  
然現象・客観的事物）の場合については、前記連体形「し」に準  
じて解釈できる。

完了の助動詞に接続するものとしては、「にしか」が七例見え  
るだけで、「てしか」はすべて希望の意を表わす助詞となってい  
る。「にしか」は過去の意と思われる294の歌の一例だけで、他はす  
べて完了である。そしてその主体は、第三者が四例、事象が三例  
である。

#### B、「けり」の用法

一、未然形「けら」一例

○此花乃一與能裏波百種乃言持不勝而所折家良受也（卷八、一  
四五七）

これは、折られた花の一枝を指し示して、「このように折られて  
しまったではないか」といったものであるから、「けら」は過去の  
意ではなく、いわゆる完了の意に用いられたものと考えられる。  
「や」は勿論反語の意を表わす。なお

○神代欲理云傳介良久虛見通倭國者…伊比都賀比計理（卷五、  
八九四）

は武田博士によれば（「全註釈」卷五、二二二頁）助動詞「けり」  
に接尾語「く」のつきたいいわゆる名詞形であるといわれているが  
沢瀉博士（「注釈」卷五、二六一頁）や「古典大系」（「万葉集」  
卷五、四三九頁）等多くは「言伝久良久」（「来らく」とある写本  
の方が適正であるとしている）。

次に完了の助動詞に接続したものは、「にけら」が三例ある。す  
べて「にけらずや」の形で、自然現象を述べており、意味は過去  
ではなく、完了である。

二、終止形「けり」五三例

(1) 動詞＋けり。……三一（内「ありけり」一五）

＋けり。……九 (3) 形容動詞＋けり。……一 (4) ず（打消）

けり。……八 (5) なり（断定）＋けり。……二 (6) え（受

身）＋けり。……一 (7) ひ（継続）＋けり。……一

「ずけり」の例は

○默然居而賢良爲者飲酒而醉泣爲余尙不如來（卷三、三五〇）

○奴婆多麻乃伊米余波母等奈安比見禮騰多太余安良禰婆孤悲夜

麻受家里（卷十七、三九八〇）

外に、960・1548・1652・3009・3308・4049等であるが、「如かずけり」が五例  
「止まずけり」が二例「飽かずけり」が一例で、一つの型をなし  
ている。

次に用法を分類してみると、

(1) 純粹に詠嘆の意を表わすもの（詠嘆）……………二七

(2) 過去の動作・状態について詠嘆的に述べるもの（過去詠嘆）……………一〇





(4)……………ける十動詞……………一 (5)けるものを……………七  
けるを。(接続助詞)……………一 (6)けるか。(終助詞)……………三  
右の中、単独終止の例は

○如是耳有家留物乎妹毛吾毛如千歲憑有來(卷三、四七〇)  
○宇良賣之久伎美波母安流加夜度之鳥梅能知利須具流麻泥美之

米受安利家流(卷二〇、四四九六)

であるが、前者の「憑有來」は、沢瀉博士は「ケリ」と訓むべきではないかと疑問を挿んでいられる。「注釈」卷三、六三四頁「けり」はもととも詠嘆の意をこめて動作・状態を述べる語であるので、助動詞「き」の連体形「し」の場合のように、とくに連体形の余情終止の形をとる必要がないかとも思われる。後者の例は、「倒置法の表現であるから、前者の場合と同じようには論じられない」と沢瀉博士は述べておられる。(同上)しかし「りける」の形で同じく、

○神樂浪之志賀左射禮浪敷布余常丹跡君之所念有家類(卷二、二〇六)

○如是耳在家流君乎衣余有者下毛將者跡吾念有家留(卷十二、二九六四)

○如是耳余有家流物乎猪名川之興乎深目而吾念有來(卷十六、三八〇四)

の連体形終止の例があるが、これは完全に「余情終止」である。また「ける十動詞」の例は、

○山守之家留不知余其山余標結立而結之辱爲都(卷三、四〇)

これはいうまでもなく「ありけることをも知らずに」の意である。次に「ける」の用法を分類してみると、

(1) 詠嘆……………八	(1) 自己……………三
(2) 過去詠嘆……………二三	(2) 相手……………六
(3) 完了詠嘆……………一九	(3) 第三者……………二二
(4) 過去伝承……………一一	(4) 事象……………三〇

右の中、「過去伝承」の意にとったものは、菟原処女(1809・421)珠名娘子(1738・1739)、真間手児名(1807)浦島太郎(1740)その他の伝説をうたったものの例で、「過去詠嘆」の意にとれないこともないが、

○皮爲酢寸久米能若子我伊座家留(一云三穗乃右室者雖見不飽鴨家留可毛)(卷三、三〇七)

の「伊座家留」は「家牟」といい換えて得ることからみても伝承(伝聞)の意と解するのが適當である。「けむ」に過去伝承の意がある)

完了の助動詞と接続したものに、「りける」四例、「にける」八九例、「てける」二例、「たりける」一例が見られる。「りける」四例の中三例は余情終止の形をとって居り(前掲)すべて過去詠嘆の意を表わし、他の一例は「咲けりけるかも」(43)で完了の意を表わす。「にける」は「にけり」に比べて著しい用法のちがいはなく、やはりすべて「完了詠嘆」の意と解される。しかしこの中「かも……にける」の形二例及び「にけるかも」の形四例は、前者は「か」が疑問、「も」が詠嘆、後者は「かも」が詠嘆をそれぞれ表わすものであるから、「ける」は単なる完了の意と解すべきで

あろう。また体言に直接つづく形が二例（5・149）あるが、これも単なる完了の意と思われる。右以外の四一例は、係助詞「や」及び「か」を受けて結ぶ形が各一例ある以外は、すべて「ぞ」を受けて結んでいる。なおその主体は、完了の場合、自己一三、事象三五、完了詠嘆の場合、自己八、三者二、事象三一となっている。「てける」二例とも「完了詠嘆」で、一は自己、他は相手の動作を表わす。「たりける」一例は余情終止の形をとり、自己の動作の「過去詠嘆」を表わしているが、これは「ける」の所で記した。右の外、「ける」と「らし」と接続したといわれる「けらし」一七例、「にけらし」一七例、「りけらし」一例がある。

「けらし」一七例の中、次の三例は、動作の現在における存続を表わしているので、「完了推定」の意を表わすものと解される。

○去年之春相有之君余戀余手師櫻花者迎來良之母（卷八、一四〇）

○晒鼻乎曾噓鶴劍刀身副妹之思來下（卷十一、二六三七）

○平等女等之後乃表跡黃楊小櫛生更生而靡家良思母（卷十九、四二二二）

これ以外はすべて「過去推定」の意である。またこれら十七例の中、相手の動作を表わすものが一例（630）あるが、他はすべて、第三者及び事象である。なお、

○諸石社見人每余語嗣偲家良思吉……（卷六、一〇六五）

の如く、「こそ……けらしき」の形のものがある。「にけらし」一七例中、次の一例だけが「過去推定」の意と思われるが、他はすべて「完了推定」の意である。

○墓上乃木枝靡有如聞陳奴壯士余之依家良信母（卷九、一八二）

但しこの「依家良信」には、助動詞「に」の表記がないので、用例としては適確とはいえない。またその主体は、三者が一例、他はすべて事象である。「りけらし」一例は相手の動作の存続（完了）を推定している。

四、已然形「けれ」……一六例

(1) こそ……けれ。……………九  
こそ……ずけれ。……………二

(3) けれど……………一  
(4) けれこそ……（けれ）……………一

右の中、「ずけれ」の例は、

○吾背子我如是戀禮許曾夜干玉能夢所見管寢不所宿家禮（卷四、六三九）

○奈良山乃峯尚霧相字倍志社前垣之下乃雪者不消家禮（卷十、二二一六）

であるが、「ズ」は仮名表記ではない。また「けれこそ」の例は、

○安之可伎野保加余母伎我餘里多々志孤悲家禮許曾波伊米余見要家禮（卷十七、三九七七）

である。意味は「ければこそ……」と同じである。この已然形が助詞「は」「ども」等を伴わないで条件法を表わすのは、上掲の「恋礼許曾」（639）にも見られる如く、万葉集には時々見られる用法である。しかし「こそ……けれ」の形で、「こそ……しか」の場合のように条件法を表わす用法はない。

次に「けれ」の用法を分類すると、

(1) 過去詠嘆……五。自己及び相手の動作を表わすもの各一、第三者（伝説）の動作三。

(2) 純粹詠嘆……一。自己の状態を表わすもの三、相手の状態を表わすもの一、事象を表わすもの七。

完了の助動詞と接続したものに「にけれ」が四例、「たりけれ」が二例ある。

「にけれ」は、第三者の動作を述べるのに用いられているが、記述性が強く、詠嘆性は稀薄である。「こそ……にけれ」一例、「……にければ」二例、「にけれ」で「にければ」の意を表わす条件法が一例ある。次の歌がそれである。

○…節間毛惜命乎露霜之過麻之余家禮奥墓乎此門定而…（卷十九、四二一一）

計	伝聞去	過去去	完了去	詠嘆去	詠嘆	完了	継続去	過去去	
22	0	0	0	0	0	5	1	16	き
415	0	0	0	0	0	32	26	357	し
24	0	0	0	0	0	0	0	24	しか
461	0	0	0	0	0	37	27	397	計
1	0	0	0	0	0	1	0	0	けらけりけるけれ
53	1	15	10	27	0	0	0	0	
61	11	19	23	8	0	0	0	0	
16	0	0	5	11	0	0	0	0	
131	12	34	38	46	1	0	0	0	計

計	事象	三者	相手	自己	
22	0	8	0	14	き
415	35	69	79	232	し
24	3	4	0	17	しか
461	38	81	79	263	計
1	1	0	0	0	けらけりけるけれ
53	33	6	3	11	
61	30	22	6	3	
16	7	3	2	4	
131	71	31	11	18	計

「たりけれ」は二例とも「こそ……たりけれ」の形で、「完了詠嘆」の意に用いられている。

なお「き」の未然形といわれる「せ」の用例が二五例ある。すべて助詞「ば」を伴って仮定条件法をなし、「せ」自身には過去の意はない。動詞「す」の未然形と見る説もあるが、助動詞「ざり」「なり」「り」（完了）「に」（完了）に直接接続している例からみてやはり助動詞と見るべきであろう。なおまた「き」の未然形と推定される「け」についても検討の要があるが紙数の関係で省略する。最後に、便宜上「き」及び「けり」の用法を次に一覧表に示して見る。（未然形の「せ」及び、完了の助動詞に接続したものを除く）

註(1) 「日本古典文法」その一「コソ」の係り結び（『解釈と鑑賞』十一月号九七頁に「奈良時代のコソ已然形の呼応において大切なことは、已然形のところで断止しないのが原則であるといふことである……コソを承けながら、そこで断止する例は、奈良末期に至らなければ現はれることなくそれも大伴家持に集中的に見られる……」とある。また十二月号一一九頁に「已然形は、奈良時代以前から、それだけで、順接、逆接の前提句を形成する機能をもつてゐた。コソは、その前提句を、多く逆接とするために、投入されたのだつた。……」ともある。